

プロジェクトワークにおけるアドバイザーとしての教師の役割

新潟大学留学生センター非常勤講師

足立 祐子

<キーワード>

プロジェクトワーク、自立的学習、教師の役割、インターアクション、
学習者ストラテジー

1. はじめに

新潟大学留学生センターの日本語カリキュラムの中にプロジェクトワークという科目がある。プロジェクトワークとは、ある外国語を学習する際、学習者個人やグループに対してなにかのプロジェクトを設定しそれを遂行していく過程でその外国語を使用しながら学習していく活動のことである。新潟大学留学生センターのプロジェクトは、留学生が興味を持っている各自のテーマについて、アンケートやインタビュー調査をおこない、その調査データを分析し、みんなの前で発表するというものである。アンケート作成や調査データの処理などを通して、各学生が日本語という言語をいかにうまく運用していけるかという体験学習に主眼をおいている。また、学習者が主体的におこなう自律的学習が中心になっているため、教師がどのように学習者の発表準備に対してアドバイスを与え指導していくかがむずかしい。

本稿では、このような学習者の自律的学習に、教師がどのように関与し指導していけばいいのか、教師の役割について、筆者がかかわった1997年後期のプロジェクトワークの活動過程をふりかえりながら考察する。

2. 自律的学習とプロジェクトワーク

なぜ自律的学習が必要なのかという点については、議論を教育の理念的な分野にまで展開していかなければならない。しかし、大学生レベルを対象とした語学教育に限っていえば、学習者はすでに学習の経験を持っており自分自身で学習の計画をたて自主的に学習をすすめる能力がある。よって、学習者が自分にあった個性的な方法で学習をすすめることでより高い学習の効果があがる。そういった意味で、留学生センター内の学習者による自律的学習は必要不可欠なことと考えられる。また、これは、筆者個人の考えだけではなく、田中・斎藤(1993)で、すでに述べられている。田中・斎藤(1993)は、学習者の多様性を指摘し、1)学習者集団のカテゴリーとしての多様性、2)学習者ニーズの多様性、3)学習者の学習特性の多様性と三つに分類し、これらの多様性がある限りコースに合わない学習者が出現する可能性を指摘し、個人学習を中心に必要な範囲でコースあるいはグループ学習を取り入れるべきであると提唱している。(注1)新潟大学留学生センターを例にあげると、各学生の専門分野によって、また、今までの学生の日本語学習歴や各個人の学習方法によっても多様性が存在する。そして、学生の多様性すべてに対する対応は不可能であ

るため、学生主導型のプロジェクトワークがコースの中に組みこまれている。他大学の留学生センターでも、コースデザインにはさまざまな工夫がなされているであろうが、このプロジェクトワークは新潟大学留学生センターのコースデザインの中で、一つの特徴であるといえる。

3. プロジェクトワークの内容と実際－1997年の記録から

3.1. 1997年後期のカリキュラム

プロジェクトワークは週に2コマのクラスで、1997年は、表1のようなカリキュラムでおこなわれた。

(表1) 1997年度後期プロジェクトワークのカリキュラム

週	月曜日	水曜日
1週め	(開校式)	自己紹介、大学探索
2週め	名前、住所を書く。生協などの申し込みをする。	日付のよみかた。 ごみの出し方。
3週め	大学の外に出て大学の周辺の探索。	買い物のしかた。郵便局へ行く。
4週め	(文化の日)	場所をたずねる。バスに乗る。
5週め	各クラスで自由に活動	各クラスで自由に活動
6週め	健康調査(アンケートのとりかた)	健康調査(アンケートのとりかた)
7週め	(振替休日)	今後の方針についての説明、プレゼンテーションの方法。
8週め	テーマについてディスカッション	テーマについてディスカッション
9週め	各学生の個別活動 (アンケート作成、調査、データ作成、分析、発表原稿づくり)	
↓	↓	
15週め	発表練習など	

このカリキュラムは、教員全員の話し合いのもとに作成されたものであるが、ほとんどの留学生がゼロビギナーであったため、前半は、学生生活に必要な事柄を体験的に学習できるようにカリキュラムが作成された。特に言語習得場면을教室外の場面に設定し、教師以外の日本人ともインターアクション(注2)ができるように考えた。

3.2. 二人の学生についての個別活動例

9週め以降、プロジェクトワーク担当教員4名が中心になって、各二名ずつの学生の指導をおこなっていった。(注3)ここでは、筆者が担当した二名の学生の個別活動について簡単に紹介し、発表までの各作業過程で筆者が観察できたことを箇条書きにする。

3.2.1. テーマ決定からアンケート作成

各学生はあらかじめテーマを選んだ動機やどのような内容を調べたいかなど、プロジェクトワークのテーマに関する質問票に記入し、その内容にもとづき教師と学生が話しあいながら、テーマ決定からアンケート作成までを行う。留学生Aは、テーマ決定からアンケート作成まで1週間あまりでスムーズにできた。しかし、これは留学生Aの日本語力の

高さとは関係がない。留学生Aは、他の学生と同様ゼロビギナーであり、アンケート作成を終えたのは10週めの終わりである。ゼロビギナーが日本語を10週間勉強しても上達はあまり期待できない。ただ留学生Aは自分の持っている日本語力を100%使って、自分のテーマを決定しアンケートを作成するストラテジー(注4)をよく知っていたといえる。アンケート作成の際も、アドバイザー役の筆者だけでなく周りにはいる教員にいろいろ質問して、自分が理解できる日本語をうまく使っていた。

一方、留学生Bは、Aと対照的にテーマ決定はできたものの、アンケート作成に時間がかかり結局冬休みまで使うことになった。学生の性格にもよるが、教師からアドバイスをもらうのは、学生として「よくないこと」、「ずるいこと」という文化の差からもでてきているようであった。また、留学生Bは他の学生と異なり自国で少し日本語を勉強した経験があり他の学生に対する自負のようなものもあったのかもしれない。筆者と留学生Bはできるだけ、何度も話しあい、学生が教師をリソース(注5)としてうまく利用していくことも重要なことなのだとということを確認しあった。

ここで観察できたこと：

- ①辞書や資料などの物的なリソースを活用できても、教師や友人など人的なリソースを活用することがうまくできない学生もいる。
- ②学習者ストラテジーについては、人によってさまざまであるので、教師がこのストラテジーを使えばいいのにとおもってもそれを直接口に出してはいけない。間接的に示唆して学生に気づかせるのはよいが、直接的に言うと学生の自尊心を傷つけたり、慣れないストラテジーのためかえって学生の負担になったりする。

3.2.2 アンケートの実施とデータ集計

留学生AもBも、この過程は比較的順調に進んだ。この段階にはいってくると、二人とも人的リソースをうまく活用できるようになった。特にデータ集計はコンピュータを利用して表計算ソフトに入力しグラフを作成しなければならなかったりするが、問題が起こると何度も友人や教師に聞いていた。また、教師にたずねる際は、日本語を利用するので、教師と学生間で自然なインターアクションがおこり、日本語での質問のしかたがなめらかになっていくのも観察できた。

ここで観察できたこと：

- ① 学生自身が自分の持っている能力を客観的に把握している場合は、さまざまなリソースを活用して目標達成にむけて主体的に進むことができる。重要なことは、日本語力であれ、コンピュータの活用能力であれ学生に自分の持っている能力がどれだけあるのかを意識化させるよう促すことである。
- ② ①でいう学生の意識化は、教師と学生のたあいのない会話の中で学生に気づかせていくのがいい方法ではないかと考える。時には、教師が学生に、教師自身の、ある能力に対する不足分をどのように補っているか、自分のやり方を例として見せなければならぬときもある。

3. 2. 3 データ分析と発表原稿作成

データ分析に関しては、二人の学生とも問題なく進んだ。データの分析結果について、他の学生もまじえて数人で話し合ったり、日本人の学生と意見を交換したりするのが教師にとっても興味深い時間であった。しかし、発表原稿の作成の段階にはいると、またA、B二人の学生のふるまいが対照的であった。留学生Aは、当初から自分が理解できる平易な日本語を使うという姿勢であったので、簡単でわかりやすいものができた。特にAは、発表のとき、原稿を見ずに発表できるかどうかまで念頭におき、原稿を作成していた。一方、留学生Bは、単純な原稿を作ろうとはまったく考えていないようだった。母語である程度作成したものを、日本語に翻訳していた。筆者は、Bの母語が理解できなかったので、結局、英語を介在させて、Bの発表したいことを確認しながら一文ずつBと二人で日本語の原稿を作る作業をおこなった。原稿を作成する時間は、長くかかったが、Bを中心に筆者が手伝うという形態ですすめることができた。

ここで観察できたこと：

- ①学習者に主体性を持たせてすすめる場合、かなり時間がかかるが、時間を使うことで、学生の考えが、教師にも、また学生自身にもよく理解できることになる。
- ②問題なくすすむことができる学生が必ずしもこのプロジェクトワークを成功させているとは言えない。留学生Aの場合、ほとんど問題なくすすめているが、そのため教師とのインターアクションが少なかった。プロジェクト設定そのものが、留学生Aにとって、簡単だったのかもしれない。

3. 2. 4. 発表練習と実際の発表

発表練習は、担当の教師だけではなく、教師全員の協力のもとにおこなわれた。学生にとっても、さまざまな教師に自分の発表練習を聞いてもらい助言をもらうことがいい刺激になったのではないかと考える。発音やイントネーションについては、この発表練習を通じて学生個人個人の問題点を意識化させ訂正するいい機会になった。また、教師にとっても、各学生の日本語発音矯正のために、どのように助言を与えれば言いか話し合い、情報交換できる機会ができた。

実際の発表は、発表順番や学生個人個人の緊張の度合いにも影響されたが、各学生の個性がよく出ていた。

ここで観察できたこと：

- ①プロジェクトワークは、他の科目よりも、教師の話し合いや情報交換が活発におこなわれるため、教師自身の学習の場も多く存在する。
- ②発表練習を何度も繰り返すことで、教師と学習者の関係が深くなっていく。また、教師も学生の練習を何度も聞くことで、各学生たちをどのようにすればリラックスさせることができるかを経験的に習得していける。

4. 学習者の自律的学習に対する教師の役割

ここでは、1997年後期プロジェクトワークの作業過程で筆者が観察できたことを整理

しまとめ、学習者の自律的学習に教師がどのような役割を果たすべきか、教師ストラテジーとも言えるべきものを考察する。

4.1. 学習者ストラテジーに関する項目

3で観察したことは、学習者ストラテジーと呼ばれるものと深い関係にある。学習者ストラテジーについては、オックスフォード（1994）が提示したものが一番詳しい学習者ストラテジーのリストだと言われている。（注6）オックスフォードは、学習者ストラテジーを直接ストラテジーと間接ストラテジーに分類しさらにそれぞれを三種類に大別している。発表練習などの場合、繰り返し練習をおこなうなどといった直接ストラテジーも使うが、教師の役割と大きく関係しているのは、間接ストラテジーのほうである。オックスフォードによると、間接ストラテジーは、以下のように分類している。

間接ストラテジー

1) メタ認知ストラテジー

- ① 自分の学習を正しく位置づける
- ② 自分の学習を順序立て、計画する
- ③ 自分の学習をきちんと評価する

2) 情緒ストラテジー

- ① 自分の不安を軽くする
- ② 自分を勇気づける
- ③ 自分の感情をきちんと把握する

3) 社会的ストラテジー

- ① 質問をする
- ② 他の人々と協力する
- ③ 他の人とのエンパシー（empathy）をもつ

4.2. 教師の役割に関する項目(1)

4.1.で示したオックスフォードの間接ストラテジーにしたがって、教師の役割項目を抽出する。

1) じゅうぶんな情報提供と学生との共通認識の確認

じゅうぶんな情報提供によって、学習者は自分の学習目標を明瞭にし、計画をたて評価をすることができる。また、教師と学生との間に学習目標、評価法など誤解が生じないように共通の確認が必要である。新潟大学留学生センターのプロジェクトワークの場合、何がこのプロジェクトワークの目的なのかを教師と学生の共通理解として確認しあうところから、このプログラムがはじまる。

2) 教師自身が相談役・助言役であることの自覚

学生の不安を軽減し、学生自身が自分の感情をきちんと把握できるように、学生と話しあえるじゅうぶんな時間をもつ。また、これは情緒ストラテジーの項目にのみ対応するのではなく、もっと広い意味をもつ。教師も人間なので、学生との相性などもあるだろうが学生と話しあうというインターアクションの中でさらに相談役・助言役

としての成長がみられる。相談役としての知識もある程度教師は知っておかなければならない。

3) 学習者が社会的ストラテジーを活用できるような状況作り

質問をしたり他の人と協力したり、他の人へ感情移入ができるようになることがいかに学生個人の日本語学習に有効かを体験学習できるような場をもうける。

プロジェクトワークの場合、学生対教師という1対1の関係を持つ機会が多いので、その学生にあった方法で状況づくりをすることも教師の役割の一つである。

学生が体験した後、その学生にとって社会的ストラテジーが必要でない結論づけたとしてもそのことに関して教師がコントロールする必要はない。教師は学生の促し役ではあるが、管理者ではない。

4.3. 教師の役割に関する項目(2)

4.2.では、学習者ストラテジーにおける間接ストラテジーから、教師の役割を抽出したが、筆者の経験では、これだけではじゅうぶんな項目をあげたとは言えない。

さらに付け加えるべき項目として、以下の項目をあげる。

4) 教師自身の学習意識

筆者がプロジェクトワークを学生と体験し強く感じたことは、教師の学習に関する意識である。教師自身の *teacher's training* に対する意欲とも関係する。さらに、細かく分類すれば、教師自身の日本語力、教師自身の学習者ストラテジーに対する知識、教師自身のコミュニケーション能力である。これらすべてがそなわっている完璧な教師は存在しないであろうから、教師が自らをふりかえり、学習者や他の教師たちとのインターアクションにより成長を遂げていこうとする意識が必要であると考えられる。

5. 今後の課題

新潟大学留学生センターのプロジェクトワークを通して、教師の役割がどのようなものかを考察した。その結果、四つの大きい項目を抽出したが、さらに細分化をすすめていき、内容の吟味をしていかなければならない。また、教師の役割をじゅうぶん考慮したうえで、*teacher's training* にどのような具体的な内容が必要なのかを考察し実証することを今後の課題としたい。

(注)

(注1) J.V.ネウストプニー(1995)でも日本語教育の新しい習得の場面として学習者の自律について述べられている。pp.238-240

(注2) インターアクション (*interaction*) とは、相手にはたらきかけることで、自らも変化していく相互作用のことである。

(注3) ただし、担当教員であるないにかかわらず、センターの教員すべてが協力して学生たちの活動をたすけるという形態をとった。

(注4) ストラテジーとは、方略、方策のことで、日本語教育では学校教育や家庭教育の経験をとおして各個人がもっている学習方法のことをさす。一般的には、学習ストラテジーまたは学習者ストラテジーという。

(注5) リソースとは、材料や素材の意味で、ここでは学習のための素材、材料をさす。たとえば日本語学習の物的リソースとしては、教材、教科書などの日本語教育用につくられたものや、文字媒体による書籍、新聞、放送媒体によるテレビ、ラジオなどがある。

(注6) J.V.ネウストプニー (1995) pp.249-251

参考文献

- J.V.ネウストプニー (1995) 「新しい日本語教育のために」大修館書店
レベッカL. オックスフォード (1994) 「言語学習ストラテジー」凡人社
田中望・斎藤里美 (1993) 「日本語教育の理論と実際」大修館書店

要約：

International Student Center in Niigata University has Project Work class, one of special classes. The activities of this class are trying to interconnect a classroom with the real society, and also to take aim at student's autonomous study.

This paper aims to describe the record of Project Work class in 1997 and from this description tried to focus on teacher's role as an adviser in this class.

As far as teacher's role as an adviser, we have to think of the list of learner's strategy, which is one of the most important factors to make the teacher's role clear. In this paper, how indirect learner's strategies are connected with teacher's role was discussed.

The list of teacher's role as an adviser shows the following:

1. Sharing the aim of Project Work class and a lot of information with learners
2. Having consciousness of an adviser and counselor
3. Setting the situation which learners make a choice of social strategies
4. Trying to learn various faculties which is necessary for learners' centered study

In addition to that, by observing Project Work class, it is concluded that the teacher is not a controller, but a promoter of the learner's study.